令和２年度　自己評価・学校関係者評価

岐阜県立岐阜北高等学校

学 校 番 号	2

1　学校教育目標	1 知・徳・体の調和のとれた生徒を育成する。 2 確かな学力を身に付けさせ、創造的思考力と主体的実行力とを併せ持つ生徒を育成する。 3 品性がありグローバルな視野と地域社会に貢献できるたくましい実践力とを兼ね備えた人間性豊かな生徒を育成する。 4 倫理観や規範意識に基づく社会性を育むとともに、他者を思いやる心に富む生徒を育成する。 5 健康維持や体力づくりを推進し、自他の生命を尊重できる生徒を育成する。
2　現状の分析	○誠実で礼儀正しく、スマートな生徒が多い。頭髪・服装・行動ともに突出する生徒は少ない。人間関係も落ち着いている。 ○部活動への加入率は、全体で約９０％と、文武両道を目指す生徒が多い。ここ数年の進学実績は、国公立大学を中心に堅実な成果（国公立合格者約２００名前後）をあげている。令和２年度入試では現役で、京都大学に２名、名古屋大学２０名、国立大学医学部医学科５名、また国公立大学合計２３２名が合格するなど大きく健闘した。 ○生徒、保護者を対象とするアンケート（令和元年７月実施）では、本校の教育方針・学校経営、家庭との連携、教職員、学習指導、生徒指導、進路指導、健康管理・安全指導、学校行事等の各分野において、生徒は３７項目中、３２項目、保護者は３９項目中、３１項目において、８０％以上の肯定的な評価を得ている。特にコロナ対策に関する質問について、高い評価が得られた。 ○単位制として２年目を迎えた。１年次においては、従来からの数学と英語に加え国語の分割授業を実施し、基礎学力の定着を図った。 ○「地域共創フラグシップハイスクール事業」（ふるさと教育、県教育委員会研究指定事業）の２年目として、１、２年生を中心に探究的な学習に取り組んだ。コロナ禍での活動のため協働作業を行わず個人研究としたり、外部機関との連携を控えたりしたが、１年生では「地元岐阜の活性化のための方策」をテーマに、また２年生では「発展途上国の開発援助のための方策」をテーマに実施した。 ○「進学指導重点校事業」（平成２９年度より、県教育委員会研究指定事業）４年目となるが、高い志を持つ生徒の継続的な育成をすすめるとともに、大学入試改革を踏まえた進学指導体制を構築した。 ▲交通安全指導については、年間を通して定期的に実施しているが、自転車通学の生徒が多く、登下校時の自転車事故を完全に防ぐことが難しい状況にある。今後も細心の注意を払って指導する必要がある。
3　学校の抱える課題	・単位制導入による、きめ細かな進路指導や多様な学び・探究的な学びの実現 ・県教育委員会研究指定（進学指導重点校事業・地域共創フラグシップハイスクール事業）の推進 ・本校進学実績の一つの指標となっている名古屋大学等、難関国立大学への合格者数の増大 ・特別活動、学習活動等において、生徒が積極的に地域社会と関わる教育活動の推進 ・教員間の情報共有、連携による組織的な教育相談体制の構築 ・グローバル精神を育む国際交流活動の推進 ・学校ホームページ、一斉配信メール、各種メディアを積極的に活用した広報活動の推進 ・ＡＬ型授業、探究活動に適したＩＣＴ環境の整備 ・校内防災体制の不断の見直し
4　今年度の具体的な重点目標	◇　進学重視型単位制高校としてのコンセプトの確立 １、２年次が単位制となり、来年度、全年次が単位制となることを見据えて、進学重視型単位制高校としての基盤を確立させる。 ◇　県教育委員会研究指定事業（地域共創フラグシップハイスクール事業・進学指導重点校事業）の推進 １　地域共創フラグシップハイスクール事業 グローバルな視野をもって、地域課題を発見、解決する探究的な学びを通して、地域創成などの様々な分野で活躍できるリーダーを育成する。 ２　進学指導重点校事業 高い志を持ち、難関大学を目指す姿勢・学習を継続していくことのできる生徒の育成を目指し、大学入試改革に対応した新しい進路指導体制を構築する。 ◇　ＩＣＴ環境の活用 ホワイトボード、プロジェクター、書画カメラ、タブレット等を有効に活用する。 ◇　新型コロナ感染症拡大防止を意識し、学校運営にあたる。

年　　度　　目　　標			年　　度　　末　　成果と評価			
5 評価項目 領域・分野	6 重点目標の達成に必要な 具体的取組・方策	7 達成度の判断・判定基準 あるいは評価指標	8 取組状況・実践内容 評価項目の達成状況等	9評価 A･B･C･D	10 成果○と課題▲	11 総合 評価
学習指導	①進学重視型単位制の教育課程の実施と基盤整備 ・単位制の共通理解 ・履修方法の説明及びその登録 ・主体的・探究的学びの研究 ・ＩＣＴを活用した学びの充実化 ②生徒が中学校へ出向き、中学生に学習指導や進路のアドバイスを行うボランティア（スダディサポーター）を実施する。	① ・単位制教育課程のコンセプトを生徒に理解させることができたか。 ・進路に応じた履修登録ができたか。 ・ＩＣＴを活用して効果的に授業を行うことができたか。 ②スタディサポーターの学習ボランティアに自主的に参加し積極的に活動することができたか。	① ・コロナ感染での休業により予定通りではなかったが、オンラインでの学年集会にて説明を行い、周知した。 ・担任が個別に面談を行い生徒の進路に応じた選択を行った。 ・11 月下旬にタブレットを用いた授業をするためのアプリ「MetaMoJi（メタモジ）」の使い方の職員研修を実施した。 ・タブレットを用いた先進的な研究授業を行った。 ②コロナ感染拡大防止の観点から中止となった。	A	○カリキュラム委員会、各教科、学年会と連携をとりながら単位制の実施に向けて取り組むことができた。 ○急な休校で、オンライン授業の導入・実施となったが、ＩＣＴ機器の利用への理解の深まりだけでなく、互いのオンライン授業を観ることにより、各職員の授業スキルの向上にも大いに役立った。 ▲タブレットが配備されて間もないこともあるが、「MetaMoJi（メタモジ）」を活用した授業の拡大を図ること。	A
進路指導	①「キャリアパスポート」「ポートフォリオ」を活用し、学びのＰＤＣＡサイクルの確立を図る。 ②１年生で基礎学力、２年生で応用力、３年生で大学入試レベルの学力を確実に身に着けさせる。 ③補習、土曜講座、特編授業、学習会を効果的に実施する。	・ 進路実績 ・ 卒業後の追跡調査 ・ 生徒・保護者対象アンケートの分析 ・ 各種考査、外部模試の結果	①「キャリアパスポート」は年度当初の休校で出遅れたが、定期考査ごとを節として記入している。記入状況は概ね良好である。 「ポートフォリオ」は本年度から導入された「classi」に集約した。まだ完全に定着したとは言えないが、アンケートなども蓄積されるため、ポートフォリオとしての機能は高い。 ②休校明けの模試で成績が大幅にダウンしたが、学年を中心とした結果分析・生徒との情報共有を行い、秋の模試では改善が見られた。 ③休校の関係で１，２年生の補習は実施できなかったが、３年生は補習・土曜講座を実施した。また集中学習会も実施することができ、生徒アンケートでも高い評価を得た。	B B B	○「classi」を導入したことで生徒と教員でポートフォリオを共有できるようになった。 ▲まだ生徒も教員も慣れていなく、完全には定着していない。来年度に向けて利用方法の確立が必要である。 ○模試の分析・活用を進めることができた。 ▲基礎力・応用力を付けるための具体的方策が弱い。 ○コロナ禍の現状で出来ることは実施できた。 ○学習支援員が補充されたため学習室延長も実施できた。 ▲休校の関係で実施できなかった取り組みも一部あった。	B

	④国や大学の動向を的確に把握し、情報提供に努める。		④学年集会等もオンラインと併用して実施できた。また保護者説明会もオンラインで実施しアンケート結果も良好であった。Classi を使っての情報発信も有効であった。	A	○オンラインで実施することで、時間場所の制限がなくなり、効果的に実施できた。	
生徒指導	①北高生としての誇りを持たせ、社会のリーダーとしてふさわしい人間形成を図る。（イエローカードを活用した指導）	①授業規律の確立、場に応じた挨拶、端整な身だしなみができているか。	①毎月２回の身だしなみ指導を生徒指導部が昇降口で行うだけでなく、教室において担任から服装チェックを行うことで、学校全体でより有効な指導ができた。また、生活委員・ＭＳＬによる挨拶運動も行ったが、進んで挨拶ができない生徒もいた。	B	○特別指導が３件あったが、その後、３人とも落ち着いた生活をしている。継続して見ていきたい。服装の乱れは気になるほどではない、落ち着いた雰囲気の中で学校生活を送っている。 ▲自ら進んで挨拶がする習慣をつけさせたい。	B
	② ・命を大切にする教育を進め、薬物、防災や交通安全教育を推進する。 ・情報社会への理解を深め、情報を正しく運用する能力を育成する。 ・県のネットパトロールとの連携を図る。	②交通事故、交通マナー違反、情報モラル違反の件数が前年度に比べて、減少したか。	②校外交通指導、ハザードマップの作成、指導部通信（Kashiwa）、オンラインによる１年生の「情報モラル」集会、北署の少年補導職員よる１年生保護者対象の「情報セキュリティー」講話によって啓蒙活動を行った。	B	○不審者情報など生徒へ伝えるべき情報を、指導部通信（Kashiwa）を出し、素早くクラスへ発信し、注意喚起をすることができた。 ○自転車による交通事故は、コロナのため学校が始まったばかりの６月は６件と多く発生した。件数だけ見ると昨年より３件減少している。幸いに今のところ大きなケガもなく、命の大切さについて今後も継続指導していく必要がある。 ▲自転車のマナーに対する苦情の電話やメールを数件もらっている。マナーについての指導を今まで以上に行っていきたい。 ▲情報モラル違反については、軽微な違反が発生しているので、今後も注意していきたい。	
	③対話を通して信頼関係を構築する教育相談に努め、一人一人の自己有用感を高める。検査や調査の分析結果から現状を把握する。	③校内、保護者、関係機関との連携により、生徒の援助が適切に行われたか。必要な情報や資料を生徒や保護者に適切に提供できたか。	③支援が必要な生徒については、学年会、教育相談係、部顧問、教科担任などで情報を共有し、またスクールカウンセラーと連携し、組織対応で取り組むことができた。	A	○教育相談では、今後も支援が必要な生徒を早期に発見し、連携して対処に努めていく必要がある。	
特別活動	①HR 活動を通してお互いに理解し合い、協調性を育て、自己の生き方を考えさせる。また、集団や社会の一員としての自覚を深め、人間関係を密にして健全な生活態度を養う	①北高祭や球技大会において、生徒が自主的・自発的に企画・立案・運営できたか。	①コロナ禍でクラスでの活動が制限されたが、文化祭や球技大会において、どのクラスもクラス一丸となって取り組み、盛り上がることができた。	A	○生徒会活動や部活動における生徒同士の協力により、コミュニケーション能力が育成された。また、活動を制限された中で、目標を達成するために創意工夫をこらして取り組むことができた。強い意志と、広い視野を身に付けることができた。	A
	②学校生活や行事において、主体的で自発的な企画・実践・評価を行い、課題に対して仲間と協	②生徒が委員会活動や学校行事に自主的に参加して、満足感・達成感を得られたか。	②いろいろな行事が中止または変更されたが、創意工夫し活動を続けることができた。	A	生徒は大きな成就感を得ることができた。	

	調して解決する柔軟性を養う。また、社会・集団との関わりの中で積極的に自己を生かしていく態度を育成し、地域社会の一員として規範意識の高揚を図る。		生徒会中心に制服の見直しに着手し、課題を持って活動することができた。ボランティア清掃活動など、生徒が地域社会の一員として貢献し、社会生活における規範意識を高めることができた。環境衛生活動優良校として３年連続で表彰された。		▲今後の課題として、熱中症や感染症、台風などの災害への対応を考え、行事の開催方法や開催時期の検討が必要である。 ▲学校行事や部活動の成果をＨＰやオンライン配信などで更に積極的に広報していきたい。	
	③自らの興味・関心に従い部活動に意欲的に参加することにより、自己の可能性にチャレンジするとともに、学年を越えた人間関係を構築し、自主性・社会性を育成する。	③部活動に積極的に参加し活動できたか。	③部活動加入率は88%。コロナ禍において大会や活動が制限された中で、感染症予防対策に務めながらも、今できることを考え、どの部も前向きな活動ができた。	A	▲部活動において、ルールの遵守が曖昧になってきている。下校時刻、自主練習など規則を見直し、活動を盛り上げたい。	
保健管理	①定期健康診断や保健行事等を通じて健康管理についての意識を高める。	①定期健康診断後の受診率の向上に繋がったか。また、健康管理についての意識の変容に繋がったか。	①定期健康診断は予定を変更し７月から12月にかけて実施したため事後指導が十分にはできなかった。そのため受診率も昨年度より下回ることが予想される。再度受診勧告をしたい。保健行事（熱中症予防講習会・生徒救急法講習会等）はコロナ禍の影響で予定通り実施できなかったが、「保健だより」やその都度タイムリーに資料を作り啓発を行った。熱中症については重症者はでなかったが、休校開けには部活動や体育授業で体調不良を訴える生徒はいた。	B	○学校保健計画や保健室経営計画に基づいて、常に課題を持ちながらコロナ禍の中でできる範囲で意欲的に保健管理や保健指導に取り組むことができたが、次年度はコロナ禍での行事の実施方法を一考したい。	A
	②環境衛生活動の充実	②学校薬剤師と連携して、環境衛生の定期検査と日常点検の結果を、環境づくりに繋げることができたか。	②学校薬剤師との連携を強化し、環境衛生活動の指導助言を受けて、できる限りの改善を進めることができた。また新型コロナウイルス感染症予防推進についても、学校薬剤師に数々の指導をいただき、科学的根拠を示しながら予防活動に努めた。	A	○生徒委員会活動の活性化も図り、環境衛生活動の更なる向上ができた。その成果もあって『学校環境衛生活動優良校』の表彰を３年連続で受けた。学校薬剤師との連携も十分にできた。	
	③事故や感染症への対策の充実（職員の危機管理意識の向上）	③事故発生時の救急体制や、食物アレルギー対応の徹底を図るとともに、情報を共有して事故防止に努めることができたか。けがや感染症の拡大を防ぐために早期対応や予防の意識を高めることができたか。 新型コロナウイルス感染防止対策が的確に行えたか。	③職員の危機管理意識の向上を図るための研修会はコロナ禍のため例年通りできなかった。しかし、啓発活動としてタイムリーに情報を提供して共通理解を図った。新型コロナウイルス感染症予防についても、積極的に情報発信し、職員や生徒に対して啓発を推進し、予防に努めた。	A	○職員救急法講習会や食物アレルギー対応（エピペン）のシミュレーション講習が実施できなかった。その分、新型コロナウイルス感染症防止対策に力を入れた。啓発活動や防止対策は職員の協力のもと効果的に実施できた。	

安全管理	①環境衛生活動とともに、校内の安全を日常的に行う意識を高める。	①掃除監督者による日常的な安全確認がおこなえたか。また、修繕が必要な場合は速やかに修繕が行えたか。	①定期的な校内安全点検に加え、日常的な点検も実施し、修繕願いにより速やかに対応できた。	A	○校内安全点検と修繕については、効率よく進めることができ、速やかに改善できた。	A
	②災害事故発生時の緊急時対応マニュアルの周知徹底を図り、命を守る訓練を充実させるなど、防災教育を推進する	②改定したマニュアルの職員研修会や防災講話を通して、防災意識が向上したか。	②改定マニュアルの周知は研修会を通してできた。保健講話で「防災」をテーマに専門家に講話していただき、生徒・教員ともに、意識の向上が推進できた。	A	○防災の講話の講師より助言をいただき、命を守る訓練の実施方法を改善できた。今年度は２回の実施となったが、次年度は更に改善していきたい。	
カリキュラムデザイン	①　授業改善の意識の浸透 ・全職員による相互参観、授業アンケートの実施	①授業相互参観の実施状況はどうか、生徒による授業アンケートによる評価する。	①コロナにより、不実施。			B
	②探究学習実現のための職員研修の実施	②職員研修の実施実績と職員へのアンケート調査により評価する。	②探究に関する勉強会（７月）、外部講師による研修２回実施（２月）。	B	○探究学習に関して、コロナにより外部連携が制限されたが、やれる範囲で、探究学習を充実させることができた。生徒への質的、量的調査により良好な結果が出てきた。	
	③探究学習の実施	③生徒へのアンケート調査により評価する。	③本年度は外部との連携が困難であったため、文献調査を中心として、１年生は地域課題、２年生は国際的課題に取り組んだ。生徒からは多くの収穫があったという好意的な感想が多く寄せられた。量的な調査を実施し、６月・１１月で数値を比較した結果、地域・国際への興味関心、探究の手法への理解が有意に高まった。	A	▲授業相互参観など授業面のことについて、実施できなかった。コロナ状況下での実施方法の工夫が必要である。	
	④新カリキュラム作成	④北高ポリシーに沿ったカリキュラムができたかどうかで評価する。	④カリキュラム委員を通し原案から進歩させることができた。来年度夏を目途に完成予定。	A	○今後微調整が必要かもしれないが、完成に近い形を作ることができた。	

Ⅱ学校関係者評価　（令和３年１月１２日実施）
・授業参観では、真面目に取り組む姿が見られた。ＩＣＴ機器を利用することで、授業のテンポが速く感じた。 ・感染予防のため換気が必要であり、暖房の効果を心配したが、適切に温度調節がされていた。 ・新型コロナ感染症の予防によく取り組んでいると思う。今後もぜひお願いしたい。 ・制服については、ＬＧＢＴについても考慮してほしい。また校則についても定期的に見直してほしい。 ・スクールポリシーである「荒野をひらく探究人」は抽象的表現であり、現段階で評価するのは難しい。どのような場面でスクールポリシーを発揮するのか、具体的に示してほしい。 ・大学入学試験に対する学力とスクールポリシーの両立ができるか、しっかり検討してほしい。

12　来年度に向けての改善方策案
・ＩＣＴ機器を使った授業改善を推進する。特に授業支援ソフトウェアである「MetaMoJi（メタモジ）」を効果的に利用するための研修会や研究授業を実施する。 ・令和２年度における新型コロナ感染症の予防対策を評価し、今後も継続して感染防止に努める。 ・制服や校則について定期的に見直しを行い、時代の変化に応じたあり方を検討する。 ・スクールポリシーである「荒野をひらく探究人」を具体的に活かす場面を教育活動の中で創造する。特に「地域共創フラッグシップハイスクール事業」との関連を強化し、スクールポリシーを基盤とした本校における探究的な学習の在り方について検討する。